

氏名	沼田 真美
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 9105 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	加害対象および被害対象別にみた自他へのゆるしの側面 ——ゆるしの反応の水準に着目して——

主査	筑波大学教授	文学博士	松井 豊
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口 佳和
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	佐藤 有耕

## 論文の内容の要旨

沼田 真美氏の博士學位論文は、加害対象および被害対象による4つの組み合わせのゆるし現象を確認し、ゆるしの反応の水準という概念を用いて、整理を行った。その上で、各組み合わせのゆるしに影響する個人特性要因との共通点や相違点を検討したものである。その要旨は以下の通りである。

### （目的）

著者は、ゆるし研究について先行研究を概観し、以下の問題点があると指摘した。第1に、これまで他者加害および自己加害のいずれにおいても、自己被害におけるゆるしのみが測定されてきた点、第2に、他者被害におけるゆるしを測定する尺度や、定義や項目内容や日常的な現象との対応関係を検討した研究がみられず、網羅的に整理した研究もみられない点、第3に、加害対象と被害対象の各組み合わせにおいて、ゆるしの規定因に関する共通点および相違点に関する統合的な検討がみられない点の3つの問題点を指摘している。本論文では、以上の問題点を踏まえ、第1に、他者加害および自己加害における他者被害のゆるし現象の存在を確認すること、第2に、他者加害もしくは自己加害における他者被害のゆるし現象がみられた場合、加害対象および被害対象の各組み合わせにおける、特性ゆるし尺度および状態ゆるし尺度の開発を行い、各組み合わせ間において、ゆるしの反応の水準（強い否定的な反応、中程度に否定的な反応、中性的な反応、肯定的な反応）の共通点および相違点を検討すること、第3に、加害対象および被害対象の各組み合わせ間におけるゆるしの規定因の共通点および相違点を検討することを目的としている。

### （方法）

研究1では、日常生活におけるゆるし現象の実態を確認するために、ゆるせなかった出来事のエピソードを収集し、カテゴリ分類を検討している。

研究2では、他者加害・自己加害における自己被害の特性ゆるしの規定因として、成人愛着スタイルとの関連を検討している。

研究3では、他者加害・自己加害における自己被害の特性ゆるしと、自己注目および自尊感情の2側面との関連を検討している。

研究4では、屈辱感尺度(HI)を邦訳し、日本語版屈辱感尺度(HI-J)を作成し、同尺度の信頼性と妥当性を検討している。

研究5では、他者加害・自己加害における自己被害の特性ゆるしと、自己愛および累積屈辱感との関連を検討している。

研究6から研究11では、以下のゆるし尺度を作成し、それぞれ信頼性と妥当性を検討している。研究6では、自己加害における他者被害の特性ゆるし尺度を作成している。研究7では、他者加害における他者被害の特性ゆるし尺度を作成している。研究8では、他者加害における自己被害の状態ゆるし尺度を作成している。研究9では、自己加害における自己被害の状態ゆるし尺度を作成している。研究10では、自己加害における他者被害の状態ゆるし尺度を作成している。研究11では、他者加害における他者被害の状態ゆるし尺度を作成している。なお、研究6から研究11では、各研究で作成した尺度の下位尺度ごとに推定されるゆるしの反応の水準を検討し、規定因として考えられる個人特性との関連を検討している。

(結果)

研究1では、他者加害および自己加害におけるゆるしについて、被害対象として、自己だけでなく、他者(親しい人)がみられることが明らかになった。

研究2から研究11では、ゆるしの規定因について検討を行った結果、加害対象と被害対象の各組み合わせにおける特性ゆるしの側面と、状態ゆるしの側面の対応関係については、いずれも類似した傾向がみられていた。そのため、総合考察は、状態ゆるしへの影響がみられた個人特性に着目して検討された。総合考察の対象となった結果は以下の通りである。

研究8では、他者加害における自己被害の状態ゆるしに正の影響を及ぼした変数は、他者指向的反応、視点習得、誇大性であり、負の影響を及ぼした変数は、評価過敏性、累積屈辱感、状態屈辱感であった。研究9では、自己加害における自己被害の状態ゆるしに正の影響を及ぼした変数は、自尊感情、省察であり、負の影響を及ぼした変数は、誇大性、評価過敏性、反芻、侵入的熟考、意図的熟考であった。研究10では、自己加害における他者被害の状態ゆるしに正の影響を及ぼした変数は、他者指向的反応であり、負の影響を及ぼした変数は、想像性、累積屈辱感、侵入的熟考、意味的熟考、他傷であった。研究11では、他者加害における他者被害の状態ゆるしに正の影響を及ぼした変数は、他者指向的反応、不公正世界信念であり、負の影響を及ぼした変数は、内在的公正世界信念、侵入的熟考であった。

以上の結果から、自己加害においては、反芻が共通して、ゆるしを抑制しており、他者加害においては、共感性が共通して、ゆるしを促進していることが確認された。また、各尺度の下位尺度において推定されたゆるしの反応の水準は、中庸な反応が共通しており、強い反応は、他者加害におけるゆるしにのみ、みられることが確認された。

(考察)

以上の実証的検討から、著者は、ゆるしの反応の水準という概念を用いて、加害対象および被害対象による各組み合わせの共通点および相違点を検討し、反応の幅を議論する際には、加害対象を明確にする必要性を提唱した。また、各組み合わせのゆるしと個人特性との関連における共通点と相違点を明らかにし、他者被害のゆるしについて、自己被害のゆるし現象と共通して扱う一つの根拠を提示した。最後に、研究領域への貢献と社会的含意、限界と今後の展望について述べている。

## 審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、加害対象および被害対象による各組み合わせのゆるし現象を確認し、ゆるしの反応の水準という新たな概念を用いて、共通点や相違点の整理を行っている。その上で、個人特性要因との共通点や相違点を検討し、他者被害のゆるしを既存のゆるし現象と共通して扱う根拠を提示していた。これらは、ゆるし研究の発展に寄与するものと評価された。

平成31年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士(心理学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。